

# 応永期十五世紀の 初頭前後の京洛の連歌界

伊地 知 鐵 男

公家の棟梁二条良基と地下連歌の総宰救済との協力によって、ようやく全国的になしとげられた連歌風躰の革新と隆盛も、十四世紀末、救済の晩年になって、救済と弟子周阿との作風風躰の対立から、京洛の連歌界にはある偏向がきざしはじめた。それは一言でいえば、「たゞ思ひ入ていか程もしはれたる所に心をかけ」る素直な正統派的な救済の作風よりも、一見人を驚かす奇矯な見立や表現をこらした技巧的な周阿の作風が世にむかえられはじめたことであつた。良基も、そのことを嘆して、

周阿ガ句作ハ、細カニ碎キタルヲ好ミシ也、当世流行リタルハ此風躰ナレドモ、心キハメテ正体ナクシテ、人ヲ  
威サントワワシクシタル計也 『連歌十様』

と評し、心敬は「救済法師老耄の末つかたには、学びやすきによりて皆彼(周阿)が風躰になれるにや、されば艶なる道はうせて、偏に荒々しく卒爾の方になり行侍る」『老のく  
りごと』としるしている。事実、救済周阿について、二条良基が嘉慶二年(一三八八)六月歿して、それまでの連歌界の指導者層を失つたあとの京洛の連歌界は、次第に混迷の一途をたどっていったと考

えられる。

連歌会等之事、故撰政家おはしまさずして後、每人、自をたうとみて、人をなんじ侍ゆへに、先達をもなきが如

くに仕る歟、……如風聞者、梵燈僧連歌さがりたる、平井道助が句させる事なしなどと申すとかや、……遁世の

おのくが渡世のあひだの為に、他をそしりて身をかがやかすにや、数寄の道にははづれてぞおほえ侍る

『答書  
露頭』

状態にあったことを、今川了俊は歎いている。救済良基のよき指導者を失った地下の専門連歌師たち、遁世者流は互いに他を誹謗し、己を自賛することに浮身をやつすばかりで、連歌向上に身をもって努力精進しようとする者はすくなくなくなっていった。そうした悪い意味でプロ化した地下連歌師のなかであって、わずかに「救済・周阿以来の上手は師綱なり」と良基にもゆるされた朝山師綱、いわゆる梵燈があったが、彼の風躰も心敬は「前句の心をば忘れ、唯我が句のみ面白く飾りたて、前句の眼をば失へり、其比より諸人、ひとへに前句の心をば尋ねず、たゞ並べ置き侍ると見えたり」『所々』返答と評される為躰であった。そのため却って真の連歌数寄者は「近日、武家大名、又は公家様に上手はおはします」という状態で、連歌の指導権はそうした専門連歌師の手から次第に離れてしまったかの観さえあった。それは不世出の救済・周阿の二人につづく卓越した連歌師の出現がなかったという、ただそれだけの理由からであつたらうか。付合、寄合という連歌の大宗をわすれて、いたずらに奇矯な趣向だてと飾りたてた一句立の似而非連歌に当時の連歌愛好者が目を奪われ、追従し模倣したということは、そうした句風をつくった作家のみの罪に帰すべきではなく、それとおなじようにそうした風躰を好んだ当時の連歌享受層の側にも原因があつたとみなければならぬ。

了俊は、当時の地下連歌師たちを

凡は当時花の下の衆とあそばしたるは、波多野・朝山・成阿・道助等なり云々、此下には琳阿・頭阿・慶阿は得失あるなり『落書露頭』

といい、心敬は『ひとり言』に

応永年中の比より世に聞え侍る人々には、今川了俊・成阿法師・梵燈庵主・波多野・外山・平井入道道助、遁世者には中宜菴主・頭阿・畠阿などとして、やむごとなき作者侍し、この内にも末の世まで残り、世一の先達の名をえしは梵燈庵主也、その比大家には、勘解由小路道孝・岩栖院道灌・赤松の禪門など也、此外近き世までの好士は真下満広・杉原伊賀淨信・蟻川周防信永・相阿・梵阿・重阿・承祐・瑞禪・尊慶・忍誓・宗砌・智蘊、遁世者には左阿・万阿・玄阿・祖阿・春阿弥・浜名備中法育・森下入道淨蔭、此等の中にも宗砌法師・智蘊法師は名聞え堪能なりしとなり、

と、大体応永前後の十四世紀末から宝徳前後の十五世紀半までの五六十年間の地下連歌の名手とよばれた人達の名を列ねている。地下連歌師とは、いうまでもなく昇殿、すなわち禁裏殿上の交りの許されない連歌師のことである。ここにあげられた連歌師は武家（出家をも含む）・僧侶・遁世者の三つの階層にわけられるが、まず武家大名と称せられるものとして勘解由小路道孝管領斯波左兵衛督義重、  
応永廿五・八・十八歿、岩栖院道灌管領細川右京大夫満元、  
応永卅三・十・十六歿、赤松禪門赤松禪師守満菩提具、  
嘉吉元・九・十歿、らの足利幕府の管領職の家柄に類する大名たちで、ほかに『初心求詠集』已下の連歌書や歌書類に斯波義重の父義将道將や細川満元の男持之右京大夫弘源寺常喜・持賢崇福寺道賢・兄弟、畠山基国長禪寺春岩徳元・同男満家・満則、および佐々木高氏導の男高秀冷泉門下随一と称せらる孫高詮京極家、中国の大名山名時熙常照・同男持豊宗全や西国の大名大内義弘につぐ教弘なども連歌の名手とはいわれている。たにしても、彼等の功績は連歌風躰の上ではなく、もっぱら和歌連歌のパトロンとしての庇護奨励にあったものであ

る。彼等につぐ中型武家層として、心敬は今川了俊已下の名をあげる。

今川了俊は、人もしる駿河・遠江に勢力をはる今川範圍の二男、のち九州探題に推挙せられ、九州鎮撫に偉大な功績をのこしたが、九州豪族の讒にあい召還された後は、仏道歌道一筋に世を隠栖した人であった。彼は連歌を順覚・救済・周阿・良基らに学んだが、彼が和歌連歌を嗜んだのはもっぱら武家棟梁として人間修道のためのもので、決して「名聞を存ぜん」ためのものではなかった。したがって正徹の師ではあったが、彼は生涯和歌連歌界の外辺にたちつづけた武人であった。

波多野とは、波多野肥後守通郷(法名元喜)のことで、(三九〇一三)明徳はじめに幕府の評定衆に任ぜられた行政的な事務系統の幕臣

であった。『御評定著座次第』の応永三年正月に肥後入道とあるので、おそらく義満の出家(応永二年六月二十日)に殉じて剃髪し

たものである。連歌は救済に学んだ(初心求詠集)ものらしく、(三八五)至徳二年十月十八日石山寺での『石山百韻』の作者であ

り、(四〇八)応永十五年の北山殿行幸には連歌御会の人數に、地下連歌師として召加えられ「眉目無極者也」(教言卿記)としるされ

ている。その作風は『初心求詠集』に、

いとそむる藍あゐよりあをき柳かな

柳の枝を糸に見たてて、いと染むると秀句仕立の技巧など、マンネリズム化した従来の地下連歌の傾向を濃厚にもつものである。こうした句風が、当時新興の中堅武家階層に好まれた技巧でもあったらしい。(四三三)また永享五年二月の『北野社一日一万句』の作者であり、応永末から永享にかけておなじく評定衆をつとめた波多野因幡入道元尚(昌)は、この通郷の男か、一族のものであろう。

朝山とは、いわゆる朝山小次郎師綱、梵燈のことである。朝山家は代々、出雲国多文郷の惣領地頭職をつぎ、將軍

義満の側近に文筆をもつてつかえ、また九条家の諸大夫をもつとめた武人『九条家文書』であつた。

『地下家伝』

平井道助は、平井備前守、周防の国の大内義弘の家臣で、応永六年十月関東管領足利満兼に依じて和泉堺に拠つて足利將軍義持に抗した折、主義弘に種々諫言して幕府との調停をはかつた人である。連歌は、主義弘とともに良基・周阿について、相当年たけてから学んだらしく、「其比の上手と撰家（良基）（仰カ）、に下さるゝ間、人数にめされき、七十までは此道を稽古すべしと承て、憚らず出仕申けり」『古今連談集』ともいわれ、また『初心求詠集』にも良基の批判として、師綱・成阿・波多野通郷・道助四人の風躰をものに譬えているが、そのなかに「賤しき物に文なき使をせさせて、その返事を聞けば、あらぬ様なる言葉共也、されど所々にその返事かと覺しくて言葉の相交りたるが如し、とぞ仰られける、数寄は甚しければとて、常に御会に召されて、連歌の闔閤（開闔カ）をば道助に預くるなりと仰られける」としるしている。一方の好士ではあつたろうが、

ながきねを。あやめにならへ郭公

『初心求詠集』

七夕に誰かかすみの薄衣

ただ一声の郭公の鳴声は、ながい菖蒲合せの根に倣えとか、誰か貸すと霞との秀句のごとき千遍一律の洒落に類する技巧でしかない。当時の武家已下地下連歌の社界の嗜好の大概が理會（理會）でできる。

蜷川周防守入道信永もまた、幼名を千若丸といい、連歌を良基・周阿に学び、至徳二年の石山百韻の連衆でもあつた。「永の句躰（句躰）は燈庵主のかゝり也、詞あくまで上薦しく口利き人なり」『古今連談集』と評され、（四一四） 応永三十一年七月後小松

上皇の連歌御会に召加えられて

池水も木々も千秋のみどり哉

応永期十五世紀の初頭前後の京洛の連歌界

の発句をよみ、(二四二九)正長二年義教の將軍職就任の祝言にも発句を詠じたほどの名手で、永享五年二月十一日の北野社万句

には將軍一座の連衆に加わっている。そのほか浜名備中入道法育持政の一族かや森下紀伊入道浄蔭大内家奉行入道・杉原伊賀入道

浄信誠盛、男に賢盛、余伊・三上近江守入道周通や義教の右筆や評定衆をつとめた飯尾肥前守為種永祥、撰撰・石橋左衛門佐入道信

乘などがあつた。これらはともに文筆を主とした行政的職にある幕臣たちである。

成阿法師の出自は未詳であるが、大念仏寺大坂市住吉区の良鎮の勸進によつて明徳元年七月、『融通念仏縁起』二巻を開板

同書奥書などしているのもので、あるいは融通念仏宗の僧であつたのかもしれない。連歌は良基に学び、『紫野千句』『石山百

韻』の連衆であり、晩年応永はじめころは北野社の連歌奉行職をつとめ、『落書露頭』のなつた応永十九年には、す

でに死歿していたらしい。なお了俊、心敬ともに、彼を遁世者の一群のなかに記入せず、了俊已下の武家層のところに

に列記していることは、あるいはその出自が武家階級にあつたものかもしれない。

「永享の比よりは宗砌・智蘊法師、世にほまれ侍し好士也」(二四二九)と心敬はいつているが、彼らとて「偏に俗人に侍

れば、胸のうち丈夫ますらをにて弓馬兵杖の世俗に日夜そだち侍て、更に世間の無常遷變、仏法のかたの学文修行の心ざし一

塵もなく、欠け侍るゆへにや」「誠に武士連歌ものふにて、鎧兜兵杖を具足したる鬼の丈夫などをみるごとく」「手練巧みに

強力」の方ばかりで「句共に面影・余情・不便のかた侍らず哉、恋句など一向たゞしく端たなき句のみにて、有心幽

玄の物、偏に見え侍らず」返答と、まことに心敬一流の辛辣な批評であるが、これはあなたがち宗砌智蘊ひとりに対す

るものではなく、遁世者流をふくめた当時一般の連歌享受層——それはとりもなおさず、以上のような評定衆・引付

衆・沙汰人や右筆たち事務系統の幕臣家臣の中堅武家層を中軸にした連歌界の凡俗、俗情のみに終始した時好に對する憤懣でもあつたとみることができるといふ。換言すれば、当時の地下連歌を實質的に指導し、かつ中心的立場にあつた

人達の多くが、こうした中堅武家階層の幕臣たちであったのである。

こうした凡俗の詩情にのみおぼれ墮していた武家層のなかにあつて、真下満広ひとりが孤高を持していたらしい。彼は加賀守、入道し慶（啓）阿と号した。普広院足利義教の幕臣、少年のころから義教の愛顧をうけ近侍した武人。出家の年次は不明であるが、嘉吉元年義教が赤松満祐の凶刃に倒れた後、無実により管領の勘氣にふれて高野山にのぼったものであろう『長短抄』。連歌は、周阿、梵燈に学び、とくに宗砌とは昵懇の間柄で、梵燈死歿の時は宗砌とともに高野山に参籠して追善連歌を催した。彼の風躰は、ことのほか心敬の絶賛するところで、「玉をみがき、ひえやせ」て「たしなみ第一の好士」と評している。

#### ふけ嵐荻にほのめく夕月夜

荒涼とした荻原に風は吹きすさび、空には夕月がほのめく景の描写には、他の武家出自の連歌師にはみられない手腕がみられる。たとえば郭公の一声にしても

#### 聞くやいかにはうはの空音か郭公

期待していた郭公の声、それはただ瞬時に消えさる裂帛の声に、はつと意識をとりもどした聞く者の心理的な綾をもつ余情は、先の道助の「ながぎねを菖蒲に做へ郭公」の月並みな見立とは、けつして同一のものではない。しかしそのころ「世の中、目も耳も大方に侍けるにや、又上つ方などにも道の誉なくて失せ侍り」『所々』と。「大方、結構ふとくつまづきて見え侍るなかに、一人風雅変りたる」満広の風躰は、ついに世人（ことに堂上・武家階級）に認められずして世を去ったという。その死期は、正徹歿の長祿三年以前であつた。

禅僧出のものに承祐・瑞禅・尊厳や天台の僧と思われる顕証院忍誓などがあつた。その承祐は賢聖坊と号し、僧位

は法印位。永享二年正月十九日新造された室町殿の御会所で、義教が將軍になつて初めての連歌が執り行われ、その翌二月十一日月次の室町殿幕府の連歌会に「連歌惣掌」として人数に召加えられた。おそらくこれ以後、彼は將軍の主催する連歌を執行沙汰する職を与えられたものであらう。そしてこれがやがて宗匠職の起りともなったものではなからうか。その歿年は未詳であるが、『康富記』(四五五) 康正元年十一月六日の条に「元浄房前宗匠」とあるので、そのころいまだ存生していたことがしられる。宗匠は、その承祐を「都にて、我はさ程も思はざれども、たしかに花やかなる道也、人のもちあつかふ所をえて、一かど、確にのけ所をよく嗜まれたりと、普光院殿(広)（義教）御褒美有けり」『古今連歌集』と評している。また、相阿・素阿（「眼」・梵阿ともに書に巧みで多）は、ともに時宗四条道場金蓮寺の僧で、とくに相阿は心敬にたかく評価され、応永末年、しばしば伏見宮貞成親王家の連歌懐紙にも合点する点者の一人でもあった。

遁世者流の中宜庵主は未詳であるが、『初心求詠集』には、中景庵主としるして、その句

北野にて

若草の野に老松の宮井かな

と、春の若草に対して北野社の老松を配したものにすぎず、

雲のみかことの葉もなき月夜かな

の句は、中秋の明月には一片の雲もなく、その美しさには言葉もないと、両方にいいかけたものにすぎない。そのほか、頭阿・畠阿・左阿・万阿・玄阿・祖阿・春阿寛正五年春ごろ歿かなどは幕府の同朋衆であり、応永永享前後、幕府や公武の、または寺院などの連歌会にしばしば連衆として出座している康富記・満濟准后日記。兼富卿記・日工要集など。ことに玄阿については、「昔の三賢の座にまみえ奉る古風、今にのこせり、慥なる方を本として花やかなる方はなし、され共此二三代につかへ朝夕



祇候せし間、彼道の堪能也」『古今連談集』

とあるので、良基・救済・周阿の三人の指導をうけ、義満・義持・義教の三代に

仕えた同朋衆であった。祖阿は、応永八年五月には使節の一員として明国に渡り、宗砌について宗匠職をついだ人でもあった。その「句躰は古へより数に入て有しかども、近比より珍敷かたに心を寄せたると、普光院殿常に召されて

祇候の数に入し也、云ひ出せる詞ごとくに如何にもはなやかに見えたり」『古今連談集』とある。これら「たしかなる方」とか

「珍らしく花やか」さとは、いわゆる十五世紀はじめに流行した寄合こまかに組みあわせて細工がましい飾りたてたはなばなしさを意味するものと考えられる。

心敬が、なりくだれると評した中古十五世紀はじめ頃の連歌界は、以上のべたような中堅幕臣の階層を中心にして、おなじ幕府の同朋衆や時宗たちからなり、その自称点者、専門連歌師たちは、ただ時の権門権力者の容認さえあれば、一廉ひとの連歌師と自称し自負する有様であった。「世にあひ、名をだに許され侍れば、用心なく学び行侍るほどに、心言葉弥すたれもてゆき」真の風雅をわきまえず、「諸人、偏に前の句の心をば尋ねず、たゞ並べ置侍る」『所々返答』がごとき凡情と俗流化した修辭レトリックのくりかえしのみが横行した。しかもその頃の京洛の連歌会席は

都のほとりも卒爾の道に成行て、いかなるあやしの賤屋、民の市倉などにも、千句万句とて耳にみてる有様也、一座なども一時とき・半時に果て侍ることになれり、さながら此道の壊劫末法の時なる哉、いづれの道もくだり、世人なさけあさく、よこしまになり行侍る 『老のくり言』

のごとき流行と喧擾と邪惡な誹謗とが入りまじる世情を呈していた。こうした正道を踏みはずしてあらぬ偏向をきたし、世はあげてそれをよしとした無風雅な連歌界に、それとおなじ中堅武家階層のなから、宗砌・智蘊の二人が新しい連歌風躰の再建に精進するのである。